

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	篠塚 千恵子
論文題目	古代ギリシアの墓辺図
審査要旨	
<p>前 5 世紀、都市国家(ポリス)アテネとその周辺のアッティカ地方において、葬礼に用いられた香油容器である「白地レキュトス」に描かれた図像が、大部の本論文の主たる対象である。その使用は前 470 年頃から前 400 年頃まで、まさにアテネ民主政の発展期、アテネ文化の黄金時代に相当する。器面に描かれる絵の主題は、初期には婦人が室内空間に描かれる「室内図」が多かったが、世紀半ば頃から、ほとんど死に関わる主題にとって代わられるようになった。レキュトスには墓碑が描かれ、遺族である墓参者と死者が、一見何の区別もなく描かれる。申請者はこれを「墓辺図」と呼ぶ。現在 2000 点を超える遺品中、墓辺図はおよそ 80%を占める。</p> <p>古代ギリシアの死生観を探るには、文学作品(叙事詩、悲喜劇)という媒体があるが、直接死者を悼むために制作されたレキュトスにも、当時の死生観が現れているに違いない。しかし描かれた人物の生死を見分ける決定的な方法があるわけではなく、これまでの研究者の説もしばしば一致しない。なぜ死者が生前と同じ姿で、生者ととも描かれるのか、という問題にも決定的な解決は見出されていない。なぜレキュトスには墓地が描かれるのか、前 470 年頃に登場する理由は何か、なぜ他の器形ではなくレキュトスなのか。</p> <p>申請者はこうした問題にアプローチするために、本論文を3部構成とした。第 I 部「前史——アッティカの埋葬習慣と葬礼陶器の変遷」(全 2 章)は、古代アッティカの埋葬習慣をプロト幾何学様式時代(前 1050 年頃以降)に遡って考察する。特に近年新知見の著しい考古学分野の成果を踏まえた議論となる。後期幾何学様式時代に成立したプロテシス(通夜)図は、アテネがポリスとして成立していく過程で一握りの支配者層のために生まれた。墓標陶器に描かれる死者の大半は男性で、女性の死者が描かれることは稀だった。本論の主対象であるレキュトスという器形は前 6 世紀第 2 四半期にアッティカの墓地に現れる。この時期、生けるがごとき死者を大理石の丸彫墓像や墓碑浮彫に表した墓が地上に出現し、アッティカの墓地の景観が変貌する。地下墓でも副葬品の主流が宴会陶器から香油容器へ移行した。その背景にアテネの政治的社会的変化に伴う葬制の変化、貴族たちの東方、リュディア王国の香り文化受容があり、標準形レキュトスの器形の起源もリュディアにあった、などアッティカとリュディアの深い関係が明らかにされる。</p> <p>第 II 部「ルトロフォロス」(全 3 章)は、レキュトスと並ぶ葬礼用陶器であったルトロフォロスに描かれた図像を、網羅的に研究するものである。ルトロフォロスは葬礼用以外に、婚礼用にも用いられる。なぜ同一の器形が葬礼用と婚礼用の双方に用いられるのかを、図像解釈によって読み解いてゆく。葬礼陶器としてのルトロフォロスには、前 6 世紀から、プロテシス図が描かれる。この器は婚礼陶器としての役割ももっていたことから、そのプロテシス図の死者は未婚のまま死んだ者とみなされ、この器は特別の死を記念するために、墓標陶器として用いられたと解釈されてきた。申請者はこの解釈を再考、肯定しながら、アッティカで古くから行われていた未婚の死者や産褥死した者など、早すぎる死を遂げた者たち(アオロス)を特別のやり方によって記念する伝統と関連づけた。最初の墓辺図をもつ黒像式ルトロフォロスについては、アテネ民主政開始期の不安定な時代の産物として位置づけ、墓辺図がプロテシス図からの発展系であることを明らかにした。</p> <p>第 III 部「白地レキュトス」(全 4 章)は、第 I・II 部の考察を踏まえた、論文の要となる部分である。申請者はまず、白地レキュトスの最初の墓辺図や初期作例の分析を行った後、墓辺図の開始の動機を論じ、その開始がアテネ民主政による新しい葬制(戦没者国葬制度とデーモシオン・セーマ[国立墓地])と深く関係していたという仮説を提示した。一方で私的墓地では豪華な大理石の墓彫刻が前 5 世紀後半まで姿を消す。初期白地レキュトスの墓辺図の「描かれた墓」にはデーモシオン・セーマの景観が反映されているという Ch・クレルモンの説を再検討して、同様の見解に達した。次いで墓辺図の死者表現の綿密な分析を行い、死者表現の特徴を明らかにした。これらの死者像のほとんどが生みの盛りの青年や少年であり、時おり表される女性死者も若く美し</p>	

氏名 篠塚千恵子

い乙女である。女性死者像が多くないのは、幾何学様式時代からの伝統である。最後に、墓辺図の死者像と現実の死者との関係を探求し、考古学的文脈の知れるわずかな事例に基づき、男女の墓に存在する興味深い相違を指摘した。プロテシス図と墓辺図はアッティカの二大葬礼図像であり、アッティカ以外の地域では、葬礼図像が描かれることはほとんどなかった。死者を記念するための図像を必要としたのはアッティカの人々であった。分けても彼らが特別な図像を必要としたのはアオロスを記念するためだった、というのが申請者の解釈である。

前 5 世紀の白地レキュトスの墓辺図の基本は死者を追憶し、その行為としての墓供養を表したものである。身内の死者に対する敬虔な態度、定期的な墓への訪れはアテネ市民の義務であり、墓辺図はそれをイメージ化したものともいえる。遺族は複数のレキュトスをアトランダムに副葬したのではなく、ある種の図像プログラムをもって墓に納めたと推定される。白地レキュトスの墓辺図の死者像は、アオロス記念の表象であり、それはアッティカの長い伝統の継承だった、と申請者は主張する。

さらに「補論」としてアッティカの墓辺図の「余波ないし飛び火現象」と考えられるマグナ・グラエキア陶器の墓辺図を考察した。南イタリア陶器の中で墓辺図を最も多く残したアプリア陶器作例を中心に、アッティカの墓辺図の影響を探求しながら、アッティカ図像との相違、死者表現の相違を検討する。アプリアの墓辺図を必要としたのは、アプリアのギリシア都市の住民ではなく、非ギリシア人のエリートたちだった。アプリア独特の二重墓辺図には彼らのギリシア文化、端的に言ってアテネ文化への憧れが投影されている、と申請者は考える。この部分はアッティカの葬礼図像の影響・受容の検討に相当するもので、「補論」たる所以である。

厩大な研究史を踏まえ、緻密な議論によって、図像から古代ギリシアの死生観を探った成果は、学界に大きな寄与をするものと評価された。公開審査会の席上、今後の課題として述べられた意見としては以下の数点が挙げられる。レキュトスの起源を探る際に、リュディアの史的状況の議論が欠けている。デーモシオン・セーマに伴って私的墓地の状況がどう変化したかを具体的に探るべきである。「英雄化」の概念がやや曖昧である。死生観の解釈が、やや現代的ではないか。墓碑浮彫との比較、とくに眼差しの分析が必要ではないか、等。しかしながらこうした細部の批判は措いて、本論文の達成は欧米の学界にも十分通用するレヴェルであると判断された。故・澤柳大五郎名誉教授が本学に蒞かれた古代ギリシアの葬礼美術研究の種が、ここに大きく結実したことを喜ぶ評価も寄せられた。本学の博士学位授与に相応しい論文である、と審査委員会は満場一致で判断するものである。

公開審査会開催日	2016年 12月 17日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	益田 朋幸	西洋美術史	Ph.D.(テサロニキ大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	井上 文則	古代ローマ史	博士(文学)京都大学
審査委員	筑波大学芸術専門学群 教授	長田 年弘	古代ギリシア美術史	Ph.D.(ザルツブルグ大学)
審査委員				
審査委員				